

平成 16 年 3 月の解説

【3 月の天気予報から】——雪と雨の境目——

20日の春分の日、関東地方は、高気圧が北に偏り冷たい湿った北東風が吹き、雨となりましたが、日中になって気温が下がったため、関東北部や東京の多摩地方など内陸部の所々では一時雪が降りその後雨に変わりました。前日17時に発表した20日の東京地方の予報では、雨は予報していましたが、雪は表現していませんでした。関東地方の雪の降り方については、低気圧の進行コースや発達程度等が微妙に影響することを1月の解説でふれています。予報官はこれらの判断材料や気温予報とともに、2日前(17日)の最高気温が21.9度と高温だったことなどを総合的に判断しましたが、日中の著しい気温低下までは予想できませんでした。

一方、22日は、低気圧が本州の南岸沿いを進んだため関東地方は雨となり、山沿いの一部で雪になりました。この時は日中の気温低下はほとんどなく、東京地方で雪が降ったのは多摩西部にとどまりました。東京地方の前日17時の予報は「雨か雪(雨主体)」でしたが、当日5時の予報では、22日朝の関東地方でのアメダスの気温や風の分布が20日の場合とよく似ていたため、「雪か雨(雪主体)」と発表しました。実況を元に作成した20日、22日の東京地方の正しい予報は、それぞれ「雨で一時雪が混じる」、「雨か雪」となります。確かに、降雪に最も影響する気温は、東京都心で20日は最高気温7.8、最低気温2.7、22日はそれぞれ7.9、3.2と微妙だったように、この時期の関東地方での降水について、「雪になるのか、雨になるか」の判断は、当日の朝に発表する予報でも困難なことがあります。

【3 月の天候状況及び検証結果】

上旬は強い寒気が日本付近に2回流入して、1日には南岸低気圧により関東地方で雪混じりの雨が降り、6日には日本海で低気圧が発達して日本海側を中心に強風が吹きました。中旬は日本の北側を通る低気圧に向かう強い南風の日や、移動性高気圧に覆われる日が多く、全国的に高温傾向で推移しました。下旬になると、本州の南岸を隔日程度の短い周期で前線や低気圧が東進したため、太平洋側の地方で雨の降る日が多くなりました。東京では、129.5mmの月降水量のうち105.5mmが下旬に集中しています。

このような天候状況でしたが、明日予報(17時発表)の「降水の有無」の適中率は、全国平均で例年並の83%でした。地方別に見ますと、東北地方の77%と四国地方の76%は例年と比べてもやや低いものの、関東甲信地方の89%と中国地方の88%はともに例年より3ポイント高くなっています。

3月の全般的な気温の状況は、寒暖の変動が大きかったものの、月平均気温は全国的に平年の気温を上回っています。特に、北陸地方の月平均は平年より1.2も高くなりました。

明日予報(17時発表)の最高気温及び最低気温の予報誤差も、北陸地方でやや大きくなっていますが、全国平均では、ほぼ例年並の結果(最高気温が1.8、最低気温が1.6)でした。

【天気予報の利用にあたって】

気象庁は、数値予報モデルの改良や予測手法の改善を一層続け、予報精度のさらなる向上を目指しています。しかし、局地的な現象などによりまだまだ技術的に予測の難しい場合がありますので、できるだけ最寄りの気象台から発表する最新の天気予報をご利用ください。